

『伊勢物語』の註釈書(二) — 國學院大學図書館善本解題VII —

三 伊抄 写本一冊

本号と次号と二度に分けて翻刻を掲載する。まず、本書の書誌を簡潔に記す。

写本 一冊

装訂 袋綴 四ツ目

表紙 縦凡一三・七糎 横凡二〇・九糎 丹表紙

外題 「伊勢物語抄 完」 表紙左に寄せて打ちつけ書き 本文同筆 題簽ナシ

内題 「伊抄」(二丁表)

丁数 本文墨付百六十二丁 アソビ前後各一丁

料紙 雁皮紙 一面十一行書き 漢字交じり片仮名・平仮名文

蔵書印 「山門薬樹院藏」(朱長方印) 一丁表右下

奥書・識語 ナシ

書入・朱点等 ナシ

声点・清濁点等 アリ

カラー図版は、上段が一丁表、下段の見開きが、百三丁裏と百四丁表。

一源氏物語ノヤウニ
一向ニ作物語ニ

秋風の　　業平下句を

欲^レ示^二博聞^一不^レ知陷^二於穿鑿^一

陷カチス
クオリム (五ウ)

一 堯惠説物語ノ中ニ人々ノ官ニ付テ

年記不審ノ相違アリ 是ハ後日ニ

書タル綺語ナルカ故ニ後ニハ其人ノ

重職又ハ極官ノミ書ツケ侍ルヲ

書載テ其比ノ官ヲ書分サル

文牀也 芹川行幸昭宣公

賀哥以之宜准知欵

一 此物語ノ中切紙アルト云事

三条西殿御家ニハ無事ナリ

ト仰アリ

元和五三十二 (六オ)

愚見抄

一 古今集ノ貫之カ序ニ在原ノ

業平ハ其心アマリテ詞タラス

トカケリ 此物語ノ哥を見るに

心ハあくまでたりて詞ハ至ラ

ヌヤウナル所アリ 彼序ニ云ヘル

カ如シ ツラノ心ヲツケテ翫ヘ

キモノ也』(六ウ)

一 むかしおこと 昔男。うゐかうふり三段

愚見 昔ハ勿論又当代ノ事ヲモ昔

ト書事アルヘシトアリ

我本三生人前正也 疇昔セキ一念差タカフ 坡

疇昔ノ之夜飛鳴ノ而過 我者非

子也耶後赤 又云素問ニモ

昔ムカシ在黄帝生レ而神靈弱而能ニ

言ト書リ

宇治大納言物語 今ハむかしと書始也

昔ハ始トモ注セリ 其始ト云ル心ナ

ルヘシ 又昔ニ一ノ儀アリ 昔トイ

(七オ)

ヘハ何事モ無難優ナル心アリ

又ノ義ハ此物語ノ中伊勢カ我

身ノ上ノ事ナトヲモ書タレ

ハハバカリテオホノトカケル心欵

此物語ニ昔男うゐかうふりと

出してヲハリニ業平終焉ノ
事書也 尚書ニ昔ムカシ在帝堯

トアリテ

二十有八載帝乃殂落シタト

アル同躰也』(七ウ)

一 うゐかうふり

漢書ニ

帝加元服注加淳曰ク元服ハ謂ニ初冠一

加ナリ上服也 師古曰如氏以爲ニ衣服之

服ト 此説ハ非也 元ハ首也 冠者

首之所ナリ著スル 故曰三元服ト 其下汲

點傳序云 上正ニ元服ス是知ヌ

謂ニ冠テ 爲ニ元服ト云

元服首服トモ云也 中用

肖ニ云 古注ニ承和七年十六歳元服云々

如何古注勘相違ノ事多之 仍

難用欵』(八オ)

叙爵ハ始テ五位ニナルヲ云 公侯一ニ

伯子男ノ五等ノ爵ニ准スル心欵

ト素仰ノ由也 業平承和十四補

藏人オ 嘉祥二從五位下廿五才

融公ニ三歳ノ弟也

古十さうひ

われハけさゝー

一 かりにいにけり 諸抄持

逍遙院殿ハ假ノ心ニアソハス事モ

アリシト也

三朶曰

しるよしを知行ト云ハ不用也

只オリく行通給ト計見ヘシ』(八ウ)

かりにいにけりハ假行也 狩衣

ハ狩ニカキルヘカラス 看用ノ衣

裳ナレハ也 此物語ニ逢みては

心ひとつの哥の下にとはいひ

けれとその夜いにけりと

あり 是モ行テイ子タル也

一 なまめいたる ウツクシク幽玄ナ (スム用ニコル開)

ル躰也 秋の、になまめきなど

ホメタル詞也

媚有女朋比 ナメイタルハラカラ 眞名本 親親ガ十三

兄弟 ハラカラ 万三 はらからハ同腹ト書也』(九オ)

又はらからをニコリテヨム人アリ

無其理也

一 かいまみて

勺會 注見ヘシ 小規 スコシミル
ウカ、フ 窺 キ 闕 ウカ、フ

一 はしたなくて 是ハ女ヲイタハ

リテ云義ナルヘシ 勢はした

なくハ強ノ字也 愚見ニハ業平

ノ身ノ事ヲ云リ タトヘハ人

ニハシタナウワツラハサレテ

心苦キ事ノアルニヤ カ、リ

ケレハおもほえず此女を』(九ウ)

見て慰メカテラ心ヲマトハシ

タルヘシト云々 不用之

はしたなしとハ女の事也

此荒タル所ニカ、ル女ノ思

ノ外ニアルハ不便ナル事カ

ナト思心ハタトヘハ弱キ物に

ツヨクアタル事ノアルヲ

ハシタナシト云カ如シ 此女ヲ

ツヨクイタハリテ云心也

巴古里ト云ニ心付ヘシ

三朶曰

半ノ字ノ義ハ不用 タヨリ』(十オ)

ナキト云心也 直 物のはした

なる時ハ半ノ字也

中用

無相應也

一 しのふすり 昔ハ狩衣ニ摺衣ヲ

賞スル也 昔ハ奥州忍

国府ノ名物也トテ忍摺ヲ

多ク奉リシ事也

新千載

かすかの、雪まの草の摺衣霞の

みたれ春風そ吹 雅経

一ついておもしろき 融公ノ哥ヲ

其ま、返哥ニ用イシハツイテ』(十ウ)

面白と思ヘル心也

旨となんと云詞ニテ前ノ段ヲハ

タシテをいつきてト云ヨリ又

一段とタツル説アリ サレハ

ミちのくの哥返哥ニ非スト云リ
悪キ也 只ヨミツ、ケテ可然也
追付ト云カ心得ラヌ也 又当
代融公ノ哥ナレハ本哥ニハ

トラレマシキ也 業平ノ

哥ト段ヲタツル説アル

故ニ勸物ヲノ本哥ニトラ』(十一オ)

ルマシキト云也

みちのくの 此返哥ハ融公ノ

哥也 昔ハヨミステタル哥ナ

レトモ面白哥ハ児女子モ誦シ

ケリ サレハ人ノ口ニアリシ也

うつせミのはニをくゝ

是ハ伊勢カ家集ノ哥也 是

空蟬ノ贈答ニアラス 此哥

ヨリ此時相恋シタルハ御た、

う紙の端に書ソヘタリ 伊勢

ハ木カクレテ露ニヌレモハテ』(十一ウ)

ヌト云心ナルヲ空蟬ノ心ニハ我

身ノカクレテ逢タテマツラヌ

ヲ木カクレテト定テソレ故ニ
人シレヌ袖ヲヌラスト云リ
心ヲ相カヘタルマテモヨクカヨヒ
侍リ 三朶曰

伊勢ハ忍哥也 空蟬ノ

心ハ忍ヤウニテ忍ハヌ哥也

勢 此哥ヲ川原の左大臣ノ哥ト

不知メ書ヤル事ハアルヘカラス

此比此哥ノ人ノ口ニアレハツイ

テ面白ク似合タルトテ書テ』(十二オ)

ヤルナルヘシ 如此心ヲ用力ヘテ

云ル事玉カツラ巻君に

もしゝノ哥モ比類也

一といふ哥の となんト書テ

又といふ哥のトカケル 文勢

尤面白シ

上^ニとなんト書爰にといふ

哥ノト書爰前生後トモ云

ヘキカ

一ミヤヒ ミヤヒヲカハスト云テ

優艶ニケサウスル事ヲ云』(十二ウ)
八雲 情也 精也 両事同事也
心モナサケアル事ニヨリテ也
三朶曰

情ヲカハス心ヲ可用也

一ならの京ハはなれ

中用

業平壯年ナラハ遷都以後

五十年計也^{如何}

一にしの京に女 撰集ノ中ノ

読入しらす

一世^{ヨソヒト}人にハゝの字ヲ入テヨム事ニ

ナレリ 又只人ト読テノ、字ヲ

スツル軟ナルヘシ』(十三オ)

中用

俗性ノマサルト云義有軟 只

かたちのすくれたるをいへり

一心なん^{三朶曰}古今序ニ人ノ情ヲ種ト

メト有 又花散里空蟬ナトハ

心持ノヨキ人也 人ハ心ノヲモム

キ肝要也

一まめ男 好色ハ実人ニアルマシ
ケレトモ業平ノ自ノ辞ハナレハ
カク書ニヤ 世ニスクレタル人
ナレハ実人モ心ヲツクスハ理ト

云也』(十三ウ)

一打物かたらひて 勢念比ニカタラフ也
一おきもせず 此哥前ノ詞ヲヨク心ニ

持テ心得ヨト也 夜ハ起モセス子

モセヌヤウニテ明シヒルハ春

ノ物トテ詠クラシツト云也

長雨ハナカムルト云詞ニヲノツカ

ラコモレリ

中用

或夜ハ子モセス晝ハ奥モセス

ナカメクラスト云リ 是ハ巨細也

サレト不捨義也 此哥ハ時節

哀ト其人ノサマ思ノアカヌ』(十四オ)

心トヲ能々思入テ吟味スヘシ

三朶 オモテ雨ノ事ニハアラス

自然ニ雨ノ心アル也

一けさうしける女 二条后トアラハ
又業平好色ノ名譽ナレハ成
ヘシ

一ひしきも 鹿尾菜^{ヒスキモ} 六味菜是

ヲカクシ題ニ哥ノ便リトセリ

三朶 タ、人ニテト業平ノ罪ヲ

ノカレテ云ニヨリ二条后ト名

ヲアラハス也』(十四ウ)

一思ひあらは 常ニ此哥ノ心ヲ思

人タニアラハ葎ノ宿ニ成トモ

子ヌヘシトヨメリ 不然 勢心ハ

タヘカタキ思ヲ云リ

三朶 袖ヲ敷トハ独臥ノ事也 心ハ

思ナクアラハ独臥ニテモタエヌ

ヘシト打フテ、ヨメリ

新古今秋部 雅経

たへてやハ―――此哥モ思ナ

ヲ有トモイカ、堪忍セントヨ

メルト見ヘタリ』(十五オ)

中用

雅経ノ哥 葎ノ宿ノ秋ノタニハ

思ナク有トモ堪カタカラニ

マシテ思アル身ハイカ、セン／＼

ト也 打フテ、云 イカ、センニハ

非ス 又秋ノ哥ナレハトテ思有

ト詠マシキニモアラス 思ハ

恋ニカキルヘカラス 新千載十一

思ひあれハ涙に袖ハくちはて

ぬ葎の宿に何をしかまし

三条入道前太政大臣

松嶋や秋風寒き旅ね哉』(十五ウ)

あまのかるもをひしきものにて 後京極

一た、人にて^{ウツ} 孔子曰見善如^{業平ヲタスケテ善也 又後人ノイマシメニ善也}不^{中用}

及見ニ不善ニ如^{ウツ}探^{ウツ}湯吾見ニ其人

矣 吾聞ニ其語矣 命語季氏十六

一にし^{本トシ}のたい 西ノタイ東ノタイ^{次トスル}

三朶 東ノ對ハ次也

一梅の花盛に

此卷にハ正月より十二月まで

月をかくさす次第にのせたり

餘卷ニハイマタアラサル筆』(十六オ)

法也 六条院悲歎ノ事日々々々

忘もやらず 紫上をしたひ給心^ラ

アラハセル也 花鳥幻

春の光を見給につけても 二月

になれハ春ふかく成行まゝに

夏衣たちかへてけるけふ斗

五月雨ハいとゝなかめくらし給

いとあつき比

七月七日例にかハリたる事多く風の

音さへたゝならす成行比

五節なといひて 御佛名もことし斗』

(十六ウ)

一たちて見ゐて見 起居スルニモ

去年ニ似ヌ也 されは起テミ

居テミヲ見ノ字ニモ見ルヘキ歎

寒夜千鳥 逍遙院

空の霜汀の ふかき夜を立て

見ゐてミ千鳥なく也

一月のかたふきて 名残ヲ思サマ也

一月やあらぬ ニツル 染用

^付月やあらぬのや文字ハやハ也

月やハあらぬ也

勢月やあらぬノや文字ライカニモ』(十

七オ)

トカメテ見ル也 此人一人マシ

マサヌ故ニ月モ春モ我身モ昔

ノ物ニテハ無ト也 我身一ツハノ

ハ文字ニアタラスノユルヘテ見ル

ヘシト也 我身モモノ身ト

ハ思ハヌヨシライハントスレハ

卅一字限アレハ心ニテモタセ

タル也 秀逸也

国史ノ傳ニ業平ハ カタチミヤヒニノホシイ 躰貌閑麗放

縦 マ、ニノ 不 レ、ス 拘 カ、ハ、ラ 略 ホ、 無 ホ、 才学ニ善作ニ倭歌ニ

千載十七

やとも宿花もむかしにゝ』(十七ウ)

一ついひち ツインチト少持心アリ

テ讀ヘシト御説也

爰作築牆 和名都加岐 一云豆以比知

壇 玉勾會 周礼引

勢

是ハたゝひたるへなるへきを

詞のあやにつくり事に書

なせるなるへし

愚見ハ餘穿鑿ニ近キ説

ト見ヘタリ

一人しれぬ 用 人シレヌハ思関也』(十

八オ)

朶 セメテ宵ノ程ナトモ子ヨカシト也

巴ヨヒく毎ハ詞書ノ度カサナル

ト云ニヨリテ人シレヌハ三関ノ

外ト云心歎

一いといたう心やみけり 命語

子曰内ニ有不 レ、疾 シカラ 何 ラ カ 憂 ヘ、 何 ラ カ 懼 リ、

一女のえうましかりける 此段誠作物語也

一芥川 三条名所トモ御溝トモサス

ヘカラス

用巴芥川 摂州ノニノ置ヘシ

露説文 露潤澤也―――』(十八

ウ)

一雨もいたうふりけれハ

勢 雷雨トケアツメ悲キ由也

朶曰 草ノ上ノ露ハ雨ヨリサキノ事也

一あハらなるくら こ、ハ人モナキヤウ

ナル所ナルヘシ 勢 人モナキヤウ

ナル所ナルヘシ 又其アタリ

ニクラナトモ有ナルヘシ 座

ノ字ノ由不用也

朶 くら 愚肖等座ノ字ヲ

用也 荒タル所ト見ヘシ

用惟 座也』(十九オ)

一弓やなくひ 是も又作物語ナレ

ハカク書ナルヘシ 愚見ノ義尤

有興欤 朶同之

一あなやハ 女ノア、トイヘル声也

一あしすりをして

カナヒソテフリゴヒマカヒアシスリシツ、
叶袖振反側足受利四管

上下
万浦
鳴響

一しら玉か 大略かト許云ヘルハ哉也

玉にもぬける春の柳かノ類也 白玉

かと云か文字ハ疑ヘル字也 疑ノ

か文字ハ花かあらぬか波のよする』(十

九ウ)

かと云やうにアルヘキ也 此哥

ハ何そとうけたれハヨリ叶ヘ

リ 朶用之
皆同之

寶物集

在五中將業平ハ昭宣公ノ御妹

ヲ鬼ニクラハレテ足スリヲメ

嘆云々

一太郎くにつね 昭宣公ノ弟ナレ

トモ接官ノ故ニ国経ノサキニ書也

用 鬼とハいふ也けりと云ニテスムヘ

キヲ又カクカケルハ業平ノ所

行ヲタスケテ云也 又真実』(二十オ)

サヤウニモアルヘキ事也

一波のいとしろくたつを見て 當流

東国下向ノ分也 山海所々ノ

旅懷可思惟之 撰集ノ詞ナ

トニモ見エタリ 朶 海ツラハ

海ノホトリ也 海頭平行余

伊真名

一しなのなる 祇心ハ浅間ノ山ハ

世ニカクレヌ山ナレハ打見ルモ

類ナキニ名ニオフ烟立ノ

ホリタルサマ目モ驚計』(二十ウ)

面白ケレハ遠近人モ此景氣ヲ

見トカメヌ事アラシノ心也 旅

ノ空ニテハ月雪雲風モ悲

キ事ハ珍シカラス 時ニ至テ

ハ又カ、ル旅ニモアラスハイカ

テナト心ヲ述ル事侍ル也

巴

遠近人モ見トカメヌ事ハアラシ

サレトモ我ホトニハ感スル事

ナキ欤 今迄カホトニハ沙汰モナ

キト也 用云此義精スキ

タル欵』(二十一オ)

一道しれる人もなく 三菜 道シレル人モ

ナクテトハ被承ノ無故也

一八はしとハいひける 天福ナシ

一ほとびにけり 乾飯

シノニクフツゴロノ ホシイヒラ 密食懷中之 糲 日本――

四聲字苑云 餉 カレイヒ 以食送

人 和名
行旅具

一すゝろ 朶辛也 辛勞ノ心也

坐ノ字ヲ用也 坐_レ愛

黔南行

籌裏ノ行人白盡_ニ迷_フ 惡藤

牽_レ頭_レ石齧_レ足』(二十一ウ)

一するかなる 朶 旅中ナレハ此人_ニア

ヒテ販京ノ心シタルト也 此哥ハ

文ノ中ノ哥ニハ非ス 修行者_ニ

對ノヨメル也 自然_ニ京_ヘ泄聞

へハノ為ナリ 業平ノ漂泊ノ

天地即衾枕ナレハ夢モナ

キ躰也 新古今十詞書_ニ――

是ニテ見レハ都へノ哥ト見へ

タリ

用 京へノ哥_ニ見レハ別後

ハ夢ニモ不逢ト也同』(二十二オ)

一時しらぬ 此哥第三句ニテコト

ハル也 時鳥鳴や五月もまたしらぬ

雪ハふしのねいつとわくらん 定家

一都鳥 朶 鷗ノ類也 鷗_ニ色々アル也

一名にしおハ、新古今

人を猶うらミ_ニ――

一舟こそりて

大原ノ販途_ニ送_ニ竹香上人ノ北

遷_{一ヲ} 元南江

窮海謫居千里程 途中推乃_レ

手話_ニ離情_ニ路人亦泣秋風暮』(二十二

ウ)

君_ハ上_ニ北船_ニ吾上京 兼成卿三四句引

一みよしの、永傳 不_レ貳之_ニ美 ヨシミヲ 田文記

永介 ニ真名

既切 日ニヒタフルニヒタフル 日六 頓

ヒタフル 日廿五 切 用 後撰ノ哥_ニハかりくとな

くと

よめり 後撰七行かへりこもかしこも

―― サレハ聞人_ニヨリ替ル欵

勢 厂金ノヨルくト鳴ヤウ_ニ聞

ユル故_ニ君ハ方々ニヨルトヨメリ 今

業平ヲ智_ニトラント思心ノ

フカキヲ云リ 我心ヲ鴈_ニイハセ

タル也』(二十三オ)

一この野ハぬす人あなりとて

一むさしのハ 爰ニテハ女カ男ヲ妻ト

云也 男女トモ_ニ妻ト云ヘシ 万葉_ニモ

アリ 其夫 万十 用若草ノ萌ノクメニ
野ヲ焼也

勢 古今ノハ春カ野遊の哥也 春日

野トアリ 以之案之此哥春日

野トアル哥_ニテアルヲ取テ

物語_ニ作り侍ルトテ武蔵野

トアラタメタルニヤ 武蔵野

ハ野遊_ニハアマリハルケシ 集

ノ春日野猶面白キ哉』(二十三ウ)

一 ゐていにけり 此物語ノ誹諧也

一 むさしあふミ 勢 サスカクル鎧ノ

縁也 カケテ頼ムト云ン枕詞也 心ハ

タノマレ難ケレトモサスカニカケテ

頼ムハノ心也 問ハヌモツラシ問

モウルサシトハ思フ中ノサスカニ

忍事アルニアヤニクナル心也

誠恋路ノハカナキサマ也

用 枕詞ト序哥トハ違也 さしす

きのくるすの小野天原ふしの

煙などノ類枕詞也』(二十四オ)

一夜もあけハ 家鳥可鶏 イヘツトリカケ 河泊 カハ

万七 にはつとりかけのたれをのミたりおの

なかき心もおもならぬかも

万十六 さすなへにゆハかせ子ともいちいへの

ひはしよりこん狐にあひさむ

此段皆狂言也

一 なてうことなき 勢 コ、ノ心ハ人ヲ

榮同之 カロシメヌ詞ト見エタリ 何条

トハ人蔑如シタル詞也 サモ

ナキトハ宜キ人ト也

一 女かきりなくめてたし』(二十四ウ)

一 魚ひす心を見てハ 此哥ヲ哀ト

女ノ思へとをしたる儀ありて

はいか、せんと斟酌スル也 業平

ノ主ある物ニカク承ルハ夷心

と思ヘル也 惠美酒心 エヒスコロ

一 あてわか 用スム

アテ 高貴成支平好而 榮清國トモアリ 真名本

一 むつましき事こそ 勢又ハ夫婦

ト云許ニテ昵キイモセノカ

タラヒモナケレト別ヌレ

ハ悲トモイヘリ』(二十五オ)

一手を折て 用 四十ヲ用也

有常年ヨリテノ事ナルヘシ

一年たにも

用 女モサコソ別ノカナシカラ

ト也 少有常ヲスカス心ニヨム也

ナクサメテ也

一 是やこの 君か御けしと云

トノ字此哥ニオイテハ肝要也

一 業平ハ雲上人ナレハ天女ノ

衣ヲ着用ト也

勢 業平殿上人ナレハ天ノ羽衣』(二

十五ウ)

ト云リ 又尼ノ方ヘヤレハアマノ

羽衣ヨリキタレリナト愚見ニハ

シルサレタレトモ其義ニ及ヘカ

ラス 只ホメタル許也

和 ス 賈至 テニ 早朝 ニ 大宮 ニ 王維

尚衣方々進翠雲裘 モ 三昧詩

百言志尚衣掌供冕服

宋王賦上翠雲之裘

一 よろこひにたへて ニコル

用 前ノ哥ニハ衣裳ヲホメタル

許ニテ祝者ノ心不足也 サテ』(二十六

オ)

次ノ哥ヲヨメリ

一 あたなりと 爰ノ心ハ花ハアタ

ナルモノナレトモマレ／＼来タル人

ヲモ待ツケタル也 アタナラヌ
ト云心也

勢 又之義ハ花ハ年々サケハ又

問人モアルヘシ 只我身コソア

タナレノ心モアルヘキニヤ

年々歳々花相似 歳々年々人不同

一けふこすハ 業平女ノ云ヘル所

ヲウツテヨリ』(二十六ウ)

表ハ花ノ事也 下ハ女ノウツ

ロハヌ先ニ来リタレハコソト也

勢 此哥贈答ノ本トスヘシト也

又愚見ニ云 消スハアリトモハ花

也 花ト見マシヤハ雪也

けふこすハ ハト云ハ女ノアメナル

事ヲイハンタメ也

自恨尋芳已太遲昔年曾

見未開ノ時如今風擺花狼籍

緑葉成陰子滿枝 杜牧之

一おとこちかう有けり 私万葉集』(二十

七オ)

石川ノ女郎贈ル 大伴ノ宿祢ノ

田主^ニ 遊士跡吾者聞流平之

類乎

一紅に匂ふハ いつらハとれと云心也

又いつれと云心モアル也

一紅に匂ふか上の 好色ノ事ニカ、

ハらすして白菊の紅に匂ふは

折タル人ノ袖ノ色香にこそ

あれと也 祇 匂ふかうへとハ

重タル心ニ非ス 其上ニナト云

類也 花見つ、人まつ』(二十七

ウ)

韻府菊下 潜无日无酒宅中菊檣

陶潜摘菊 乃盃把坐其側帳望久之

見白衣ノ人ノ至^ヲ乃弘送酒

便酌醉帰 續晋春秋

巴 此紅ニ匂ハ深キ匂也 前ノ哥

ノ紅ニ匂フハ色メキタル事也

用 イサ、カウツロフ上ニ白花也

重トハ見ス

一宮つかへしける 用 寛永二八廿九

御説門ノ宮つかへなるへし 古

抄ニ染殿ノ宮つかへとあり』(二十八オ)

一後たち 女房ノ惣名也

後漢書 皇后紀注

鄭玄注礼記曰 后^{コトハ}之言後言ハ

在夫之後故以女謂後達^ト

以下無本傳注

一かれにけり 直ヤカテ離別也

シカレ共只カレ^ニ成ト見タ

ル義ヨシ 男方ヨリカレ^ニナル也

一あま雲^ニの^ニ有常女

勢 天雲也 ヨリト云ン為也 雲^ト

云モノハ手ニトラレヌヲ云リ』(二十八

ウ)

一あま雲^ニの^ニ業平 朶巴雨雲也

用 雲ハ経ト降トヲ兼也

我ゐる山の風はけしきとハソナタ

ニ主アル程ニ家近ツクヘキヤウナ

シト也 男ノ身ヲ雲^ニ此ノ也 わが

ハ男ノわか也

用 又云わかハ女ヲサシテ云也

ミるめなきわか身ヲうらとなと云

心也 むかひをさして云也

一とよめりけるハ 筆者ノ詞也

一かへり事ハ京ニ 此詞ニテ返事』(二十
九オ)

ヲ道スカラ待心見エタリ 思人ノ

方ナレハ也 用 返事声ニヨムモ不

苦 堯孝ナトモ時々返事トヨミ

ケルト也

一いつのまに 此返事ハ女ノ立帰り

て男ノ心ヲ疑ヨメリ

一男女いとかしこく^{う菜} 能思アヒヌ

ル中ノ軽ク変シタル事ヲ云ン

為也 勢カシコクトハ真実也

一出ていなは心^{ニコル}かるし

勢 いとかしこく思ひかハしてト』(二

十九ウ)

ヨクく中モヨキヲ心カシコシ

ト人ハ云ヘキ也 夫婦ノ中

ニハ人シレヌ恨モアルモノト也

イサ、カト云首尾ニ心軽シト

云リ 用 男ニ難ヲキセテヨ

メリ

一けしう^{スム 桑巴} ケシウハ恠ノ字也

アヤシキ也

コトナルト云義相当セリ 男ノ

心ニサセル題目ニテハアラシ

ト思フ程ニ一段トシタイテ』(三十オ)

ナク也

勢 けしう 恠ノ字也 事ノ外ニト也

肖 コ、ノ詞トモ上ニ心ヲくへき事

モヲホエヌヲト云ル心ニ叶ヘリ

一とミかうみ^{ツケ字也とかう見る也}

一思ひのかひなき世也けり

女ヲ恨スノ我ヲ觀スル也 是真

実毎篇ニワタルヘキ事也

君子ハ有ニ諸已而后求ニ諸人

大学

一人ハいさ 万葉の哥をいさ、か』(三十
ウ)

取かへける也

一いまわとて 業平ノ心ニ忍草コ

ソ生ストモセメテ忘草ノ種ヲ

タニマカセスモカナト也

一忘草うふと 女ノ心ミしかく

云ルヲ業平ノ、トカニヨメル

面白クヤ

一ありしよりけニ^{勝ノ字也} 哥ニモ詞ニモ^{けにスム}

一わするらんと思ふ

思ふ心ノと文字ニノ句ノカシラ

ニツケテヨムヘシ 用けに勝也』(二十一

方)

万葉ニハ異トモ書也 同心也

一中空に

女間乎うしと思ひて^{いロ}」^{万十三}

一をのか世々に

離別ノヲノレくノ世ニ成ヲ

云 ウトクトハ妹せノ契リモ

ナク成ヲ云也 肖 此詞ハ哥

ヨリツ、ケ見ルヘシ 勢 中空

ニ立ゐる雲ナト云テ能々

我身ヲ觀シタル歎ト思

タレハ又カレ／＼成タル也』(三十一

ウ)

堪忍ノ心肝要ナルヘシ 前ノ哥

ノ返ハ當トモ見エスヤ

朶 とはいひけれどをのか世々中空

ノ空ノ哥一首ニカケテハ

見ス 右ノ一段ニ畢竟ノ見

ルヘシ

用 をのかよく 離別ノ後ナレハ

ウトク成也 又云一度いにし

中なれハうとく成也

一はかなくて 勢はかなくてハ

何事とハなくてたえたる』(三十二オ)

なるへし

一うきながら――一度別テ後ウ

キ物ニ思ひはてたれとも猶

忘レサレハかく恨ツ、猶恋シ

ト云リ カツハカツ／＼ニ非ス

カク也 かつこえて――同心也

肖惟用直 同之 勢 業平ノ心ハウケ

レトモ恋ガタケレハカク恨テ

モ猶恋シキノ心也 サレハ返シ

ニハ行末ノ事ヲノミ云リ

カツハカク也 又カツハ此哥』(三十

二ウ)

テハ且ノ字ニテカツハ恨カツ

ハ恋キ心モ有ヘキ歟

朶 かつ恨つ、ハ少恨義也 カクニ

ハ非ス かつあうてわかれも――ノ

カツニテハナシ

一されハよと 肖勢 此返哥ハ

又心ヲ、コシテヨメリ

朶 されハよ 男ノ心ニ女ノ忘

マシキト思タルニ如此云ヲ

コセタレハ男少自慢シテ

ノ詞也』(三十三オ)

一あひミテハ 朶 河嶋カハスト云

義ニ非ス 流水ノ嶋ニサ、ヘラレ

テ中絶シテ未逢ト云義ヲ

用也

一とはいひけれと 朶 哥ハ末遠ク

読ケレトモ堪カ子テ其夜行

テ子タル也 いにけりハ行けり也

一いにしへ行さき 愚見ニハ是

ヨリハ又一段也 上ノ段ニハ

カ、ルマシキトアリ 御説ニ

ハ読ツ、ケテ見ルヘキニ』(三十三ウ)

ヤト云々

定一字不違

後柏原院 あひミテハ心ひとつを

かわしもの

宸筆 水のなかれてたえしと思ふ

ふこと、もなといひて

天福 一字不違

水のなかれてたえしと思ふ

とはいひけれとそのよいにけり
いにしへ行ききの事とも

なといひて

右岡本いにしへをアケテ書ト見え
ス』(三十四オ)

一秋のよの―

朶 山ハさけ海ハあせなん世なりとも

君に二心わかあらめやは鎌倉右大臣

愚見 千世ハ千代ニハアラス

古

なかしとも思ひそ果ぬむかし
凡河内躬恒
用方

一秋のよの千夜を―

睦言ハナラ尽セシト也

朶 千萬年契りても人間ノ

一生終ニハ空カルヘキノ義也

一ゐ中わたらひ 鄙活
イナカワツラヒ
真名本

天福ノ本此分脇ニ付也 スム

一男も女もはちかハして』(三十四ウ)

一男ハ此女 勢 男ハ業平女ハ

有常力女也 是ハ貞女ナルニ

ヨリテ名ヲアラハセリ 此
段其作事ト見エタリ

一ツ、ゐつの井ツ、にかけし
此由天福案用同

御説韓井ツ、石ナトヲモツ
ツ、キ

マヌ井也 ツ、井ツ、ト云ハ重

詞也 ツ、井ツノツハヤスメ

字也

勢 ツ、井ノ井ツ、也 文字タ』(三

十五オ)

ラサレハツ文字ヲ加タル也

瀧ツ浪ナト云カ如シ ツ、井ト

ハ丸キ井ノモト也

ツ、井ツ、井ツ、トハ重詞也

朶 ツ、井ツノツヤスメ字ニモアリ

当流添字ニ用ル也

朶 一首ノ心ハトカク戯マキル、内

ニ成長シタル義也

袖中抄三 又或人ハツ、井ト云

事ニツ文字を一かきそへたり

つと云文字ハ休メ詞也 カミツ

中ツ下ツナト云カ如シ 扱』(三十五
ウ)

ツ、井ト云ニものたらねハ

つ、井つのとの文字をくはへ

たる也と云人侍り それも

心得られす あまりに心にまか

せたる義也と云々

一くらへこし 女子許嫁笄而字

許嫁則十五而笄未許嫁則

二十而笄亦成人之道也 故字元

礼記

祇 君ナラスノトハ必男ノ

スルワサニハアラ子トモ

業平ナラテハ我ニ誰乎』(三十六オ)

ヲモワレントノ心也

勢 フリワケ髪トハイトケナ

キ時ノ髪ヲ云 かた過ぬとハ

髪ノタケ長ク成タルヲ云也

一女親なくて 朶 女ノ親ノナキ

カ如クニ成タルニハ非ス 死タル

事也 惣ノ男ハ先女ノ所ニ

住物也

一いぬるかほにて
スム用
ニホル染

一けさうして
スム用

一風ふけハ 序哥也』(三十六ウ)

朶 序哥也 衣タツタ山名ニタ

ツタ山ナトノ類也

定家卿 此今案可興可仰此

五文字

古今十四

しきしまのやまとにハ―

の類也 此モヘスノ逢ヨシモ

カナトイハン為ニ上ハ云タルモ

ノ也

又白波ハ盗人ノ事也ト云義

不用之 此哥ノ心ハ風波ハ

ケシキ時ニ立田山ヲ越テ』(三十七オ)

艱難ヲヘテ君カ独行事

ヨト云心也
星采同

奥義抄云 此哥貫之ハ哥ノ

本ト云リト侍リ イカハカリ

ノ事ニカ侍ラン 勢 此哥ニ取

テハ風フケハトヲケハ此山

中ノ艱難ノサマニナリテ

枕詞ナカラ用ニ立テ面白ト也

朶 夜ワトヨムヘシ 夜ハトモヨム也

注ノ心ハ深夜ニ見テ面白

キ也 又白波賊ト云事モアリ』(三十七

ウ)

後漢書注 西河白波谷云々

六百番 夜恋 寂蓮

忘らる、身をハおもハテ立田山

心にかゝる沖つしら波

一河内ヘモ 飯ヒ
イキガイ

一けこのうつはもの 家子

一心うかりて

河内国たかやすの郡に在

中将のかよひ給ひし所今

中将かき内と名付たる

則是也 長明無名抄』(三十八オ)

用但證拠ニハ用かたし

一君かあたりミつゝを 休字也 用

続拾

いこま山雲なへたてそ秋の月あたり

の空ハしくれなりとも

此哥古今ニ不見
ぬる音本

一君こんと 恋つゝそふるとあり
天福同

此段作物語也

一たゝきけれとあけて
ニホル

其夫没ニ落外蕃有レ子 五年
謂婦子者
男女同之

无子三年不歸及逃亡有子

三年无子二年不_レ出者並ニ聴ニ
イテコソハ
ユルス

改嫁ニ 令惣記卷第十』(三十八ウ)

カヤウノ事ニヤ ソレモ事ニヨル也

一あら玉の

真実新枕ト可見也

千載

まことにや三とせもまたて山城の

伏見の里に新枕する

契待恋

神かけて契ることはのかひあらは
三とせの後も猶やまたまし

□仁

一あつき弓 年をへたと云に

三年の心ハ侍る也 朶 神樂ノ哥ハ品

コソ有ケレト云

ヘキ為也 此哥ハ年

ヲヘテ君ニ心ヒクト

云心也』(三十九オ)

闕 君ニ心ヒキテ年ヲヘヌル程モ

ナンチカ誓ヲウルハシクセヨ

ト也 うるわしくハ誠也 巴同之マコトシキ也

友善 日本記

忠令 見 眞名本

朶 ウルハシミ麗ノ字ノ心ハ

不用之 友善モ用也 正ノ字

直ノ字ノ心也 正直二字ツ、

ケテモ見ルヘシ 一首ノ義令ニ

三年以後改嫁事ヲユルス

トアレトモ人ニヨル物也』(三十九ウ)

我深ク誓タル中ヲ変ハ

ルハ無本意由也 ウルハシミセ

ヨト云教ハチシムル也

愚見ナト世中ノタマタス

キナルトヨメル哥モカクト

ハ云スノ玉タスキト云ヘハ

掛ル事ニナルヤウニ引トイ

ハ子トモ弓トイヘハ引事ニ

ナル也

一しりにたちておひゆけと』(四十オ)

一をよひ 指 天福勝ニ付之古友和名由比俗云於與比

季指 和名古小指第五指也

一あひおもはて

勢 消ハツルトハ思ノカキリ

ナルヲ云也 思ノ休シタル也 同

朶 女ノ実ニ変タルトハ男

ノ見スノ如此行ハ相思ハヌ

也

一とかきてそこに

用 作物語ナレハ女ノムナシク

成タルト見ルヘシ 寛二八廿九』(四十ウ)

用 指くひの女なともあれハ実ニ

死たる事もアルヘキ歟

一あはしともいはさりける

一見るめなき

勢 此哥古今ニハ返シトハ見ヘス

用 男ノ我身也 又業平ノアタ

／＼シキユヘニ女ノ身ニ恨ノ

アルヲシラテ也 かれなて

ハ離なて也

朶 わか身ハ女ノ身也 男ノ身ニ

ハ非ス』(四十一オ)

用 アマトハ業平ヲ云也

足緩来流 アシタユクナル 眞名本

一えゝす 不得也勢

朶 二条后五節舞妓ノ時

業平ノ見初ラレシト也 侘

たりける人ハ中立ノ人ト

見ルヘシ 染殿后ニ非ス 前ニ

よひくことにとよめる段ハ

キヒシクスレハ都テア

ラハル、モノ也 サレハ

染殿后ノユルシ給ト也』(四十一ウ)

一 おもえす袖にミなどのさ源天福ハくらし天福かな

朶 よりしのしハ休字也

勢 わか思ひノ哀ナルト憐

慙シテ侘給ケル喜ノ涙ノ

フカサハ舟ノヨル湊ノコト

ク也 舟モ常ノ舟ニテハナ

キ也 唐船ト也

一ぬきす 貫簀方西酒具トミユ

朶 女ノ影ノ水ニ見ユルハ不

吉ナルト云リ シカレト

モ水ヲチラスマシキ為也』(四十二オ)

一我はかり

はかりハ程也 かやうのとしハ

いつこにても下ヘツケテ見

ル也

朶 水中ノ影ヲ思シツメテ

ミレハ我影ナル程ニ物思

アルテイハコトハリト也

自問自答也

一水口に

用水口ノ蛙ハ業平也 諸声ハ

女ト也 もろオスムこニコリモス也』(四十二ウ)

鳥諸声ヲニコルト也

一色このミなりける

朶 小町ト云説不用之

祇 是ハ色このミの女ノ業平ノ

所ヲ出テ後ノ哥也

一なとてかく あふかきりのかたき也

□ニヨソヘタリ

一花の賀 イツレノ時モ十年

くニ満ヘキ祝也 勢 此賀

誰人ノ賀トモナシ

朶 染殿后ノ賀ト見ヘシ 又春宮』

(四十三オ)

ノ女御ト見ル也 両義也 二条

后ト云義不用之 用染殿

后四十賀ナルヘシ 但勸テ

モ不入事也

三代實録元慶六年三月

廿七日己巳天皇於清涼殿設

秘宴慶賀皇太后冊之算

也 皇太后去年春秋満

冊天下過密不申勤詠

故延而行之云々

一めしあつけ 豫参メシアツケ 東行』(四十三ウ)

ふしとノ席ヘ召クハヘラレ

タル也朶用同

一花にあかぬ

表ハ今日ノ御賀ノ目出タキ

事ヲ云リ 下心ニハ二条后ノ

御事ヲ花ニアカヌト云リ

カ、ルヲリニモマキレヌ思

アル所ヲ云リ 御説常ノ

ナケキニテハナシ 嗟嘆也朶用同

感動也 感情ノ心ヲ云也

朶用同

勢 今日ノコヨイト云ヲツヨ』(四十四
オ)

クアタリテ見ルヘカラス 大

ヤウニ打詠テ云ヘシ 餘情カ

キリナシ サレハ上ニ花ノ

面白キヲ云底ニハカナシヒ

ノ有也

朶 けふのこよひと云ニツヨク

アタリテ見ルヘシ 他説ニハ

不然也

一あふ事ハ

勢 詞云ニカケテ能々吟味

スヘシ 玉ノヲハシハシト云心也』(四

十四ウ)

巴 長ク見ユラント云モ玉ノヲ

ト云ヲノ縁也

一何のあたにか

一よしやくさ草の上本よならんさかミン

一宮の中 朶 禁中ニカキリテ

モ見ル也 又禁裏仙洞春宮

中宮ナトニテアルヘシ

一うけへバ 日本記ニ誓ノ字ヲ

ウケヘトヨメリ 爰ニハ呪詛

ヲ云リ

誓旦ウケハシ 誓約ウケイ 祈ウケイ』(四十五オ)

一いにしへの 卷子ヘタ 楊子漢語鈔云

卷子開 今案本文未詳 但閭

巷所縛續麻圓卷名也和名

一何ともおもはすや 巴 一度絶タル

事ナレハ業平ノ只今カク云

リトモ女ハ何トモ思ハスや有けん

と作者の詞也

一あしへより 勢 惣ノハ序哥也

朶 榮雅 立秋可

いやましに立やそふへき芦へより

けふふきそむる秋の□風元和五』(四十五

ウ)

飛鳥井殿御発起ノ時也

一ゐ中人の 此哥ヲ評ノ云也

用 少ホメタル方也 巴同

一いへはえに 心ひとつに能心ヲツ

クヘシ 三界誰一心用サシテ不入事也 不合義ニ惟文

朶 アマリニ手ノツカヌ哥也

一おもなくて 肖 少ハツル心也 巴同

生理何ノ顔面ソ

一玉のを、糸ノ下ヨリヲツヨク

シタル糸ハ引ハナレテモヒ

トリヨレ合物也 其コトク』(四十六

オ)

ニ絶テモ又逢ヘキト也

朶 アハヲナマヨリニシタル也

ヨキ比ニヨリタル糸ハホコレ

ヌモノ也

一忘ぬるなめりト

勢 人ノ忘タルカト疑テ

問恨ル也

一谷せはみ 朶 谷フカミト同

事ト云義不用也 セハミ也

一われならて

朝かほのきのふの色ハ残るとも』(四十

六ウ)

人の心をいかゝたのまん

用 薨ヲ女^ニ比^メヨメリ 巴 女ヲ

アタニ落差シテヨメリ

一ふたりして

東ちの野しまかさきの濱風に

わか紐ゆひし妹かかほのミ^ニ倅^ニ見ゆ

一紀のありつねノかり

用ニコル 采スムハ符也
ニコル也

勢 かりとハ所也 妹かりと同

妹所^{万七} 吾許^{ワカイマシマス}不^ハ来者^{万十一}

一ならハねハ

肖勢同

祇説 恋ト云事ヲ問来れる』(四十

七オ)

我しも業平ヲ思故ニ恋ヲ知

ヨシ也トアリ 勢 詞ハカハリタ

レトモ心ハ前ノ哥ト同

朶 業平ノ恋ノ先達ニ成タルハ

思ノ外ナレトモ其分ニモ有ヘ

シ 我ハ又業平ノ哥ニテ恋

ヲ知タルト也

巴 是ヲヤ恋ト云ラント有 哥^ニ

テ業平ヲ師トメ恋ト云事

ヲ知ト也

一西院のミかと サイ井トヨム 井ン』

(四十七ウ)

トハ不可読 朶用巴同 サイ井ントモ朶

一たかい子と申しまそかりけり

おハしましけり也

一御は^{ハウアリ}ふりの

續日本後紀云 承和十五年五月

巳未朔癸酉無品山宗子内親王

薨ス 淳和天皇之皇女也 遺^{ツカハシテ}兵部大輔從四位下豊江王^{トヨエノオホキミ}并五位三人^{カンコス} 監護喪葬事^ヲ一女車に 業平女^同車^{出タリ}哀^思奉ル故也 女誰トモナシ』(四十

八オ)

一ゐて出たてまつらす^{スム}久シウ逗留有^テ出シ奉ル也^{直惟}

一勢 小用將出也 葬所ヘ□事也

用 ^{ススム也}ニコルハ異也 但両義也

一打なきて ヲソキ程ニカヘラント思也

愁傷ノ中ナレハ打泣テト云也

朶 業平ノ退屈也

用 或説宮中ノ人ニ打泣テ葬

礼モセテヤミナントセシ也

宮車晏駕注天子當晨起

早作而方崩損故稱晏駕』(四十八ウ)

者凡臣子之心猶謂ニ宮車脱出^一也

漢天文志

一とかくなまめく 用 爰ニテハケサウ

スル也

一ともしけちなん^{ニコル}する^{采同}一のれる男^{オトコ}

アメノ下天下第一ノ好色人ト云

心也 女バカリノリタルト思也

五月ノ比ナレハ螢ヲ沙ノ囊

ナトニ入テモテルニヤ 螢ノ

卷ニカヤウノ事アリ 車也』(四十九オ)

ケル人女ト見ルハワロシ 業平

ナルヘシ 用同 肖 車ナリケル人

女也 誰トモナシ トモシケチトハ

蚩ヲ取スツル事也

朶 トモシケチハ女ニアラス

業平也 直同

一いて、いなはかきりなるへみともしけち

勢愚見ニハ蚩ノ上ハカリ、ニテ釈

セラレタリ 当流説ハ悉皆此

御葬ノ方ヘ取テ見ル也 出テ

イナハトハ此内親王ヲ鳥部』(四十九

ウ)

埜ヘ送マイラセタラハ此世ノ

限ナルヘキ也 ともしけちと

ハ蚩ヲケス事ニカケテ命

ノキュルニタトヘタリ 後当

入涅槃如煙盡燈滅ト云ニ似

タリ 年ヘヌルカトハ此別ヲ諸

人ノ歎心ハ老少不定トハ

云ナカラ此宮ハサカリノ御年^{廿二歳用}

ニ薨シ給ヘルヲ一入歎也 誠ニ

云カケタル也 なく声ヲキケ』(五十オ)

とハ至カ似合ヌ所ノケサウ心ヲ

イサムル也

用 年ヘぬるカト 天福本と濁也

声ハ後ノ人モサスモノ也 不可用也

譬喩ニツイテ於中鏡喩皆是分

喩ト云妙樂ノ尺アリ

廣度無數衆入無餘涅槃如薪盡欠滅^{方便品}

佛ハ不實滅衆生化縁尽テ

入滅也 薪ヲ以テ衆生ノ化

縁ニタトフル也 化縁ハ種熟』(五十ウ)

脱ノ中ニ脱ノ化度縁也

又安樂行品

隨宜轉用ト云事アリ 本文

ノ立所トハチカウテモ取合スル

事也

一いと哀あはれ

朶 泣声モ悉耳ニ入タル也 生

死ノ別ナキ義ヲ思テ衆生

ノ泣迷タルハ不便ナルト也

用 常住不滅ノ道ニ迷テ泣ヲ

哀ナルト也』(五十一オ)

一あめしたのいろこのミの

なをそ 直ノ字ト見テアリ

ノマ、ニヨメリト云説アリ

定家ノ天福ノ本ニハ猶ノ字ヲ

カ、レタリ 是尤可然也

朶 なを直ノ字モ有 サレトモ猶ノ

字也 カヤウノ時も好色ヲタ

テ、ヨク返哥シタルト也^{用同}

勢 猶ノ字宜ニヤ其哥ニテハ

サスカヨク云タルト也 好色

ノ哥ニテハ猶面白ク云タル』(五十一ウ)

ト也 巴ナヲサリノ方也

^{スム勢字巴同之}
一けしうハあらぬ

肖聞ニモ下ヲ用也 ニコル欵 又源氏

ニハスミ爰ニテハニコルト云義可

然 イツクニテモスム也 恠ノ字也

用 ケスシウハアラヌ也 然トモ
不濁也 恠也 イツレホメタル事也

アヤシウハアラヌ也

一さかしら 母レサカシラスルコト 儂 言一礼記

業平ニ女ノ思ツキテハ荷トテ

女ヲヨソヘヤラント思也

情進サカシウ 万十六 情出サカシウ 万十六 『(五十二オ)』

用 サカシラハ賢タテ也

サカシラニ夏ハ人マ子ト

一人の子なれハ 人ノ子業平也

朶 人ノ子ハ業平也 孝行ノ義也

又女ノ事ニ人ノ子ナレハ云

ト、ムルイキホヒナシト云

ハ不用也 勢業平イマタ親マ

カセナル時也 業平ノ人マカセニ

柔和ニ上臈シキ躰也 殊勝ノ

心也

一女もいやし 年ノ幼少ナルヲ』(五十二

ウ)

云リ

只賤キ方ニ見ルハケスシウハアラ

ヌト云上ノ詞ニ相違セル也

情来テ不タスマハ自禁 遊仙窟 不ニス放

推一辞一

一をひうつ 女ヲ外ヘ追出也

逐ヲイウクレヌルコハ 子 謂ニ逐出タル之者一

一血の涙を

高子臯之執親之喪也 泣血

三年 子臯名此孔子

弟子疏曰人涕淚必因悲声』(五十三オ)

而出血出則不由声也 子臯悲

無声其涕亦如血之出故云

泣血

一ゐて出ていぬ 朶 母ノ将出タルト

云誰ニテモ女ニソヘテ

ヤルヘシ

一出いとひても統後撰ていいとひてハなにかなば誰か別の 同

朶 我も死別ナルヘケレハ女モ

執心ヲ残スナト女ヲ慰メ

タル也

與ト君生別イキテ離 楚辞悲シキハ莫悲

兮生 別離スルヨリモ 古文前』

(五十三ウ)

一おやあハて 劇アハテス 日廿八

一おもひてこそいひしか 朶 女ノ親ト見ルハ

通例也 但男ノ親

ト見ヘシ 猶思テ

コソ云シカト云ハ女

ノ親ト見ユル也

思テコソ我ハ随分我人ノ為ヲモ

シリテコソ諫タルト也 勢同

一わか人ハ 用 若年ニハ哀モウキモノ

ヲサヘト云心也 末代ニハ人ヲ思フ心

モ深カラヌ由也

一うへのきぬ

楊子漢語抄云袍薄交反 和名字倍』(五十四

オ)

一はりやりてけり

一心くるしかりけれハ

一むらさきの 用 ムサシノ心ヲコメタル也

朶 丈人屋上ノ鳥人好^レハ鳥亦好^シ杜子^九

十五才

奉^レ贈^ニ射洪^ノ李四文^一

一武藏の、姉妹兄弟皆別出可憐光彩生^{ナル事ヲ}

古今十七ノ哥ヲ本哥^ノ業平^ノ

ヨメルト作者ノ釈シタル詞也

朶 紫草ハ武藏野濫觴^ト見ユ

用 ミなからハ皆ナカラ也 野ナル

草木ソワカレサリケルト同心也』(五十

四ウ)

一に^レく、ハた ^{百斬之辞}

一いろこのミ 用 女ヲ色コノミト知ナ

カラ勢^ニヨリテ憎カラヌ也

業平ノ心ニハ入タル女ナルヘシ

愚見 小町ト云リ 肖 好色ナル女

ナルヘシ 勢同

ハたハ将也 シハ^レ数ノ字也 シ

ケク行也

一いかてハた 且也

一猶^{猶也 興也}ハた、そあらさりける

一猶ハた打たのむへきやうもなき也』(五

猶ハたハ我ト諫テ捨ント思ヘトモ

捨カタキ也 二日三日ハカリ

ト見ルハ前々シハ^レト云

テアル程^ニコ、ニ如此書也

用 アタナル女ナレハ強テ思タ

エント我ト我心ヲ諫レトモ

えあらさりける中なれハと也

ハた三心かハると云事モアリ

又文法也

一新古 いにし 一出てこし

勢 屢行タル眨サヘアル^ニ二日』(五十

五ウ)

三日許ユカサレハ疑ヲ云也

或ハタノモシケナキトヲト

ロカス心也

一かやのみこと 同

今昔ノ物語ニ高陽親王京極

寺ノ寺領ノ田ニ早魃ノ年

人形ヲ造玉フ事アリ

貞観五年正月十九日壬午

二品行治部卿兼常陸

太守賀陽親王上表^{三代實録也}

一人なまめきて 業平ケサウ』(五十六

才)

スル也

一又人聞つけて 同

朶愚見肖聞両義也 愚見ヲ用也

別人ノカヨフト見ヘシ惣ノ親

王ノ此女ヲ御寵愛トハ見エス

用 女ヲおほしめして親王ノ御

寵愛也 恩恵ト斗ハイカ、

又人トハ親王ノ御憐愍ノ

女ト斗思テ業平ノナマメキ

テ我ノミト思ケルヲ親王

ノ御寵偶ト業平ノ聞ツ』(五十六ウ)

ケタル也 又ノ義親王ノ御寵

愛ノ女ヲ業平ノ我ノミト

ナマメキテ有ヲ又別人

ノ通ト業平ノ聞ツケタ

ル也 哥^ニモアマタアレハ

トヨメリ 親王ノ御寵愛

ヲハ恨へキ^ニ非ス 此義可然也

一郭公なかなか

切^ニ思へトモウトマシキト恨

タル也 ウトマレヌハヲハ

ンヌ也 用 ヲハンヌ也 又ヤスメ字

也』(五十七オ)

日本記 ^{トコヨノナカナキトリ}常世之長鳴鳥是鷄也^{云々}

一名のミたつ

けさハ朶当意ノ事也

用 名のミたつトハ庵リアマタト

無名ノ立故^ニ我ハ始テ鳴ト也

けさト云^ニカキルヘカラス

肖 名ノミタツトハ時鳥ノ

アマタノ里^ニ鳴由ノ名ノ立也

拾遺 御うたたてまつりける御子ノ

しての山こえてや

朶別之

成都記 杜宇亦曰杜主<sup>杜詩十三
杜鵑下</sup>

一庵リ多キ 肖同』(五十七ウ)

前ノ哥^ニハタト替リタルサマ

尤哀也

一家とうじ 同

貧^ニレリ夫ノ厥^{ノ家} <sup>婦謂之家 楚辭
イヘトウシラ</sup>

一女のさうそく <sup>モノコシユルヲ
白文四
陵園妾</sup> 裙慢

一出て行 惣同

勢 モナクトハ裳ヲカクシ題^ニヨメ

リ

一心と、めて 惣同

業平ノ妻^ニカハリテヨム也 ソレ

ニヨマスルト云義也』(五十八オ)

用 業平ノ女^ニカハリテヨミ

テソノ哥ヲ心ト、メテ

女^ニヨマスル也

朶 心ト、メテヨマスルトハ業平

ノ女^ニカハリテヨマレタ

ル哥ヲヨミアケタル事也

愚見^ニ返哥^ニ及ハヌト云ハ

不用 肖 業平^ニヨマスル時ノ

心也

勢 ヨマスルトハ女^ニヨマスル也

一人のむすめの 肖同』(五十八ウ)

イツキ傳^{カシツク} 女也

一かくこそおもひしかと ^{桑同スム}

一よひ^あハあそひおりて

常ノ遊覧^ニテハ有マシキ也

納涼スル也

一夜更てや、涼しき

仲夏苦^ニ夜短^ハ ^{杜詩五}

螢火乱飛秋已^ニ近 元稹

一行螢雲の ^{惣同}

朶 下ノ心ハ我忌^ニコモリ居ル事ヲ

云 魂^ニ告ヨト也』(五十九オ)

一くれかたき夏の日くらし ^{スム用桑巴同}

此哥ハ同夜ヨメルトハ見ヘ

ス 前後ハ知ス忌^ニコモリテ

昼ツカタヨメルナルヘシ

世間の無常也 以下肖同惣同

祇 其事トナクトハ春秋

ナトモ男女ノ事ヲ以政道

ノ本トセリ 只好色ノ方

ヲ本トシテ云ヘキ事何ノ

曲モナキ事也 女子ナト』(六十二才)

ヲハイカニモヨクハク、ムヘ

キ事ト云義也 コ、ヲ習ニ

申也

用 源氏ニテモ必好色ニ用タル

トハ見ヘス

祇 初草ハ若草ト云返シナレハ也

一鳥の子を 鳥の子卵也

日本記 如ニ鶏子ト云々

泉式部集

かりの子を人のをこせたるに

いくつつ、いくつかさねてたのま、し

かりのこの世の人の心ハ』(六十二ウ)

一行水と 惣同

譬ハ如ニ鏤シテ水ニ畫レ水ニ有レリ勞无カレ益ニ教

一行水と、惣同

一うへしうへバ 惣同

秋ノアル限ハ咲ヘシトヨメリ

花ヲモ賞シ主ヲモ祝シ

タル也 カヤウノ時ハ是ニテ

思慮スヘシ 業平ハ花こそちらめといへり
花こそかれめといへる心也 八雲

花ハ落ッ澗水ノ涸リ 菊衰蛩亦蟄ス 坡

玉葉集下 千五百番哥合 二条院讃岐

枝に散花こそあらめ鶯の』(六十三才)

音さへかれゆく春の暮かな

一あやめかり 惣同

風土記云 援作善反字亦
作標和名知万本 以ニ

菰葉裏ニ米以ニ灰汁煮レ之

令ニ爛熟ニ也 五月五日啖之 和名

屈原以五月五日投澗羅而死

楚人哀之每至此日以竹

筒貯米投水祭之 続斎諧記

漢建武中長沙、一 支文

一あひかたき 用 又もあひかたき人也

一いかてかハ 惣同 首尾相應言』(六十

三ウ)

語道断ノ哥也

一行やらぬ 用 つれなかりけると云

詞を能々吟合すへし

行やらぬ夢ちとハ夢中ニモ

行かよふ事のカタキ也 惣同

用 ワレナキ人ナレハ夢ハカリヲ頼ム

也

一えうましう 勢我物ニ今ハ

エ得也 用 成カタキ也

女誰トモナシ

一おもハすハ、惣同

続後撰十三

一わか袖ハ』(六十四才)

我袖ハト云ハ秋ノ夕ヲ打詠

ナトシテ見レハ花露深シ 我夕

ノ袖ハ物思ニイツトナク同

露ナレトモタヲ感シテアレハ

草ノ庵ナラヌ袖ヲヨキ

露ノヤトリ所ト暮レハ

草木ヨリケニ置アマ

ル心也 暮レハノ詞殊勝

也 肖同

勢 切ニ物思身ハ十二時中涙

ノカハク事ナシ 其上ニテ』(六十四ウ)

又夕暮ノ露置タルヲ見

テ所詮我袖ハ此思ノ

切ナル故秋ノ草ノ庵ノ

如ク常住露ノヤトリ也

ケリト領解シタル也

用 暮レハノハノ字ニ心ヲツク

ヘシ

一こひわひぬ 惣同

恋ノイカニトモセヌ思ノ

キハマリタルヲ云 年月

ヲカサ子萬ニ心ヲイ』(六十五オ)

タマシメ身ヲツクシタ

ルモカヒナケレハ打返シ

思所ヲ恋佗ヌトハ云也

肖同

一いゑつくりて

一宮ハラニこともなき 惣同

スム染

宮ハラト云ケル詞昔用ケル

ニヤ宮ノ多キ心也 女ハラ

殿ハラナトノ心也

一といひてこの宮に

用 此宮ハ伊豆内親王ノ宮ナルヘシ』

(六十五ウ)

一葎生て 大方惣同

ウレタキハウレハシキ也

愁也 憂也 カリニモハカリ

ソメニ也 鬼トハ女ヲコソ

ヘ云也

所有三千界男子諸煩惱合

為一人女人ノ業障女人地

獄使能断佛種子外面以

菩薩内心如夜叉 是ハ

華嚴經ノ文也 宝物集下』(六十六オ)

一打佗て落穂

勢 時ノアヒシラヒ面白シ

女トモノホヒロハント云ニ順ノ

イヘル也 業平ノ心用也

此段誹諧也

染 拾遺十八 恋する二佛になる

といはませハハハこれハ

いふならハ也 きかませハと

聞ならハ也

一京をいか、

勢 業平左遷ノ時ナトイヘ』(六十六

ウ)

レトモ慥ナラス 只オモテノ

マ、ニ見ルヘシ 業平時ニアハ

サル人ナレハ只世上ヲ觀

シタルナルヘシ

一住わひぬ 身ヲカクスヘキ
爪木コルヘキ

俊成卿 イツレヲモ用ラレ

タルト見タリ

一かくて物いたくやミテ う染

一わかうヘニ 惣同

古今にハ心各別也

勢 鳴ハたる鴈の涙や落つらん』(六十

七オ)

物思ふ――ト心同也

後撰六秋中 読人不_レ知

我袖に露そをくなる天川雲の
志からみ彼やこすらん

万十

此夕零来雨者コノユラヘフリクルアメハヒコホシノハヤコク舟
ノカイノチルカモシツクカ

一心もまめならさり 惣同

業平朝家ノ奉公ノミニテ

家ヲカヘリミ女ヲ思事モ

浅キヤウ也

一字佐使にて 三光此時業平臨時ニ
和氣ノ外ニソ下リタリ

ツラン』(六十七ウ)

拾遺十八 實方朝臣うさの使

に――

一志〇〇 祇承夫そ_レうの官人

一さらすハのまし 惣同
〇〇

勅使ノ下ル時驛路ノ雜事ヲウケ

タマハリオコナフツカサ也

宇佐ニカキラス伊勢齋宮

ニモアリ 除目ニモ_レ承ノ

官ハ掾ナトニモ任セリ 承
ソウノ音ナシ 古今ニ承均ゾウク

法師トアリ』(六十八オ)

謂_レ承者敬也 承猶事也 釈

承云承承上音諸事反毛詩傳

敬也 承解見上也 古記

云承承供承一種也

万十六

安積山――

右歌傳云――』(六十八ウ)

一五月まつ かをかけハ 惣同イハ 采用

昔我契シ事ヲ云出タル也

勢 昔ノ人ノ袖ノ香ト云ント

テヲケル上句也 昔ノ人

ノ心チシタルト也

九十年春二月庚子朔天皇命アコテ

田道間守モリニ 遣テ常世國ニ令求ニ

非時香菓トキシクノカクノミヲ

今謂橘是也 垂仁天皇

万十八 コレヲヨリ昔ヲ忍フト

橘歌――讀ナラハセリ』(六十九オ)
三光思出テト也

一思_レ出_レて尼になりて 惣同

三光 此女ハ出_レていなはの哥ヨミ

タル人ノ事ナルヘシト云

一そめ川を 惣同

好色ニ成カヘリテヨメリ

一名にしおは、惣同

或染川ノ名ニツケテト云ハ

アタナルヘシ 業平ハ元ヨリ

好色人也ト云々 采用同 あたハ

偽ノ心也』(六十九ウ)

ぬれきぬとハナキ名ノタトヘ也

漁夫ノ衣ヲトリテ繼母ノ讒

シタルヨリ云ト也

勢 ぬれ衣キヌ 拾遺集ニなかされ侍

ける時 菅

贈大政大臣

天下のかるゝ人のなけれハやきてし

ぬれきぬひるよしもなき

一としころをとつれさりける

業平の方へ久ク音つれさる也

肖用惟同直同

勢 業平モステ置タル故久』(七十オ)

シク音セサル女也

口用 業平ノ久ク音ツレサリ

ケル中ニ此事出来タル也

一心カ○スム衆しこくや

一はかなきハ実ナキ也

一我をハらす天しるやとて

一いにしへの 業平ノ我身ノ

事ヲ云リ 花ヲコキチ

ラシタルカラノ如シト也

愚見 女ヲアサケリ云ト

アリ 不用之』(七十ウ)

一いらへもせて

一これやこの 惣同

一度業平ヲ見捨テ出タル

女ナレハ我ヲ思事ノ古ヘヨ

リハ少モマサルニヤト思ヘ

ハサモ無ヨシヲ恨ル也 此女ヲ

オトシテ云ト云義アリ

不用之 業平ノ本性ニ相違

スル也 肖惟用占同

巴 業平ヲ思ハヌ事ノマサ

ルト也 マサリカホナキニキハ』(七十

一オ)

休字也

一世心つける

惟 世界へ心多キヤウナル義也

用 色、シキ事也 勢 人ニ嫁

ノ世ヲ経心ミタル女也 猶

好色ノ女也

朶 老女ノ立かへりて世ニ心をつケ

タル也

一いらへてやみぬへキ也 或濁也

○スム用 とりあわぬ也

一さふらふ也けり』(七十一ウ)

ニコル衆用

一百とせにゝ 惣同

江浦藻ツクモ老人ノ髪ノ乱タルニ

タトヘタリ おもかけニ見ユトハ

我ヲ恋ル故ニ其面影ノ見ユル

ナルヘシ 是へ其人ノ来ルニテハ

有ヘカラストヨメリ

一いてたつけしき

□用 業平ノコ、ニテ思オコシ

テ出タツ見テ也

一そのよハねにけり 巴 行来ハ

シラス也』(七十二オ)

一世中のれい 惣同

レイハ例也 世ノナラヒ也

我切ニ思ヲハ思也 結目ケチメ 驗ケチメ

一むかしおとこ女天ナシみそかに

一あやしきニ 勢 何トシタル

事ニヤトアヤシキト也

一吹風に 惣同

なさばのぼの字ニ切ナル心有

肖同 モノヲト云テ心ヲノコシ

タル能々思フヘシ 誠ニアタラシキ哥也』

(七十二ウ)

神何故カタラフワサモナキ

故ヲ可見ト也 いくく也 けんト

あるあへしらひ也

一とりとめぬ

タトヘ風ニ成テ有トモ此方ヨ

リユルス心ナクハ入カタシ

トヲサヘテヨメリ

一いろいろるされ 惣同

禁色ノ宣旨ト云事アリ

用 大臣ノ孫ニユルサレヌモアリ

曾孫ニユルシタルモアリ』(七十二オ)

但是ハ各別ノ事也

一大ミやすん所とていますかりける

一女かたゆるされ 業平ハ好色第^{ニコロ衆}

一ノ人也ト世上ニユルシタルト

世上ニ云説アリ 如何

女ノ侍ハ^{サフラヒ}基盤所也 ウチマカ

セテハ男ハ参入セサル所也

シカルヲ業平ユルサレケルナ

ルヘシ 別ノ近習スル由也 摂政

ナトヲ女侍ニテ御對面ハ一入

ノ賞翫也』(七十二ウ)

一おもふにハ 惣同

用 随分忍ハントスレトモ女ノ身

モホロヒナントイヘトモアフニカ

ヘンナラハサモアラハアレト也

一^{ニコロ用}さうしに^{ニコロ用} ○御さうしにハ

一^{ニコロ用}されハ○な^{ニコロ用}にの 句ヲ切也

□用されと 句ヲキルヘキ也

一くつハとりておくになけ入て

古説此所事ノ外^ニ勞ノモテ

アツカヒシ也 ツトメテト云ニ

テ心得ラレタル事也 昔ハ』(七十四オ)

殿上人貫首ヲハシメテ殿

上ニ宿直ノ有也 日給ノ簡モ

毎日ノ御番也 又宿侍ト云

モ夜ノ事也 サレハ晝夜

ノ事ヲ上日上夜ト云テ

年中ヲシルシテ其勞ヲ

知也 番ナト云ハ近代ノ事也

昔ハ殿上人ハ日々ニ参ノ

御前ノ事ヲ私ニ番々ヲ定

テ四位五位有タル事也

夜ナト殿上人多時ハ奥ヘ』(七十四ウ)

基盤ヲヤリテ疊ヲヨセテ

敷 夜ハ幕ヲタレ晝ハマキ

ナトスル也 此時業平殿上

ニアル躰ヲノ女ノ里へ行テ

朝ニトク歸テ主殿司ノ見ルニ

沓ヲ奥ヘナケ入テウヘフ

シタルカホラスル也

カヤウニ見レハ何勞モナキ也

用今ノ御番ト云ハ後嵯峨院ノ

事欤

用其勞ニヨツテ殿上人官位ニ』(七十五

オ)

進也 又公卿ニナレハ公事政

ノ才覚ナトニテ昇進アル也

用昔ハ大床子ノ御膳ヲ奉ル

時ハ殿上番ニノ陪膳スル也

主殿寮ト云御殿ヲツカサ

トル物也 其身堂上セサル

故ニ其寮ヨリ女孺ヲシタ

テ、御殿ノ事ヲ役スル也

用 主殿司ハ殿上人ノ沓ナト

取ナヲスヘキ事ナルヲ

主殿司ニモシラレシト手』(七十五ウ)

ツカラ取也

私闕非也

一わりなく恋しうう染

一おむやうしかななきミヤウシ用同

一はらへけるまゝにいとまなしき事と天

一恋せしと 惣同 此物語ニテハ

逢後恋也 哥の心ハ明也 神ハ

ウケス成ニケル哉ト治定

ノ侘タル也

万十三

何為而恋止物トイカニシテコヒヤムモノヲ

一此御門ハかほかたち 此御門ト』(七十

六オ)

云ヨリ又ハシメテ讀也 段ニ

テハナシ

佛法ニ皈依シ龍顔モ美麗ニ

マシマス也 此由國史ニノセ侍リ

一佛ノ御名を御心ニいれて御こゑハオホシ

嗟歎スル也用

一女ハいたうなきけり

一なかしつかハしてけれハニコル染

一女をハマかてさせて 一説ニ前ニ

女思侘テ里へ行トアリ

長良卿ノ所ト見ヘタリ

業平サレハ何ノヨキ事』(七十六ウ)

ト思テイキカヨフ事トアレ

ハ此所ハ長良卿ノ亭ヨリ

マカテ行ナルヘシ 私云此ミオ

カトハ白カタチヨクオハ

シマシテ佛ノ御名ヲ御

心ニイレテ申給ヲ聞テ

女ハイタウナキケリト

アレハ禁中へ皈マイラ

セラレテ内裡ヨリマカ直同

テサセ給ト見ルヘキ歎 用同

クラトハ寢殿ノヌリコメ』(七十七オ)

ナトノ事ナルヘシ 勢同

しかるとハ責勘也 イタマシム

ル心也

一あまのかる 惣同

世理ヲシレハ人ヲモ世ヲモ

恨思ヘキ事ナシ 現世後生

我カラノ心ヲ思ヘキ也

此哥二条后ノ此時ヨミ給ニ

テハ有ヘカラス

一人ノ国より 遠国ナトヘ

行トハ聞ヘサル也 業平』(七十七ウ)

イツクノ国ヘナカストモナ

ケレハ京ノ傍ニ忍テモア

(國學院大學文学部教授 徳江元正)